

日本の新進作家 vol. 11

この世界とわたしのどこか

somewhere between me and this world - Japanese contemporary photography



大塚千野《1976 and 2005, Kamakura, Japan》2005年 作家蔵

香港展

主催： 香港写真芸術協会
会期： 2012年10月13日（土）～11月4日（日）
会場： 香港アートセンター

東京展

主催： 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞
会期： 2012年12月8日（土）～2013年1月27日（日）
会場： 東京都写真美術館 2階展示室
協賛： 株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン／富士フイルムイメージングシステムズ株式会社／凸版印刷株式会社／東京都写真美術館支援会員
協力： フォトグラファーズ・ラボラトリー／フォト・ギャラリー・インターナショナル／株式会社カシマ
観覧料： 一般 700(560)円／学生 600(480)円／中高生・65歳以上 500(400)円
※（ ）は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員 ※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料
開館時間： 10:00～18:00（木・金は20:00まで）、ただし2013年1月2日・3日は11:00～18:00 ※入場は閉館の30分前まで
休館日： 毎週月曜日（ただし12月24日、1月14日は開館、翌日休館）、年末年始（12月29日～2013年1月1日）

展覧会概要

東京都写真美術館は、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神の支援をめざして、将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の場を提供するための様々な事業を展開しています。その中核となるのが、毎年異なるテーマを決めて開催している「日本の新進作家」です。本展で 11 回目となる今回は、香港写真芸術協会からの要請に応じ、日本に先駆けて 10 月に香港で開催した後、12 月に東京都写真美術館で開催します。

大震災や経済の低迷などにより、社会環境が不安定化する現在、様々な問題が山積し、既存の価値観が大きく変化しています。そうしたなかで、日本の現代作家たちは、それぞれが自分の足下を見つめながら自らの課題と格闘し、独自の世界を創造しています。本展は、個人と社会の関わりを考えながら表現を模索する、今もっとも勢いのある新進作家 5 人を取り上げて、日本の「今」を浮かび上がらせようとする試みです。

出品作家 (5名)

菊地智子 田口和奈 笹岡啓子 大塚千野 蔵真墨

菊地 智子 (きくち ともこ)

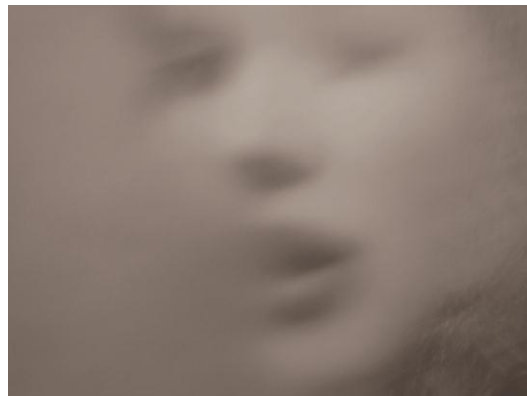
1973 年東京生まれ。1996 年武蔵野美術大学空間演出デザイン学部卒業。翌年に香港に移住。1999 年から北京に拠点を移し、『News Week』『New York Times』『Far east economic Review』『Paris Match』『V magazine』など、雑誌・新聞等を中心に活躍する。2002 年からはクリストファー・ドイルと共に、ジェームズ・アイヴォリーやピーター・チャンなどの中国人映画監督の映画にスティル・カメラマンとして参加。2006 年より、地方から都市部に集まるドラッグ・クィーンをテーマに作品を制作している。北京在住。

菊地智子《鏡の中のサンジェ、北京》
2006 年 作家蔵



田口 和奈 (たぐち かずな)

1979 年東京生まれ。2008 年東京芸術大学美術研究科博士後期課程修了。2010 年五島記念文化賞新人賞を受け、2011 年にウィーン、ロンドンに滞在する。横浜トリエンナーレ 2011 や「トレース・エレメンツ」展（東京オペラシティアートギャラリー、シドニー・パフォーマンス・スペース、2008 年）、台北ビエンナーレなど、多くの国際展に招待されている、注目の新進作家である。東京在住。



田口和奈《窮迫の、深みの》2009 年 作家蔵 Courtesy of the ShugoArts

笹岡 啓子（ささおか けいこ）

1978年広島県生まれ。2002年東京造形大学卒業。2008年に「VOCA展2008」奨励賞を、2010年に日本写真協会新人賞を受賞。2001年から写真家たちが運営するギャラリー「photographers' gallery」の創設に参加し、2003年から2008年には雑誌『photographers' gallery press』の編集責任を務めた。多くの個展を開催している。写真集に『EQUIVALENT』（Rat Hole Gallery, 2010年）、『PARK CITY』（インスクリプト、2009年）他。東京在住。



笹岡啓子《Itoman, Okinawa》2011年 作家蔵

大塚 千野（おおつか ちの）

1972年東京生まれ。10歳で単身英国のサマーヒルスクールに留学し、その体験を綴ったエッセイ『サマーヒル少女日記』で注目を浴びる。1997年、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（ロンドン）写真科修士課程修了。ヘルシンキ写真トリエンナーレ2009や「The Sum of Myself-Self portraits」展（ロサンゼルスカウンティ美術館 LACMA）、ダイワ・ファンデーション（ロンドン）など欧米を拠点に多くの展覧会に招待されている。



大塚千野《1982 and 2005, Paris, France》2005年 作家蔵

また、ウィルソン・センター・フォー・フォトグラフィー（イギリス）、ハウス・マルセイユ写真美術館（オランダ）、マリオ・テストイーノコレクション（フランス）、ロサンゼルスカウンティ美術館など数多くの欧米のパブリックコレクションに作品が貯蔵されている。2007-08年ブリティッシュ・ライブラリー（ロンドン）で Artist-in-Residence に選ばれ個展を開催。2008年にはナショナル・メディア・ミュージアム（イギリス）から Photography Bursary を受賞。2012年にアムステルダム・ハウス・マルセイユ写真美術館で個展を開催。作品集も Dewi Lewis Publishing (UK) から出版される。ロンドン在住。

蔵 真墨（くら ますみ）

1975年富山県生まれ。1988年同志社大学文学部英文学科卒業。東京ビジュアルアーツで写真を学び、2001年から写真家たちが運営するギャラリー「photographers' gallery」の創設に参加した。2010年さがみはら写真新人奨励賞受賞。2001年以降、多くの個展を開催している。写真集に『蔵のお伊勢参り』（蒼穹舎、2011年）、『kura』（蒼穹舎、2010年）他。東京在住。



蔵 真墨《神奈川県横浜市》2004年 作家蔵
Courtesy of ZEIT-FOTO SALON

(参考資料)

「この世界とわたしのどこか」

笠原美智子（東京都写真美術学会員）

※展覧会カタログ『日本の新進作家 vol.11 この世界とわたしのどこか』より抜粋

「失われた 20 年」と言われる。わたしはこの言葉に違和感がある。「失われた 20 年」が経済的観点からの 1990 年代から 2000 年代への評価であるとは知っていても、なお違和感が拭えないのは、そこには 1990 年以前への懐古の念が漂っているからである。デフレによる消費や投資の停滞、雇用環境の悪化による非正規労働者の増加、所得格差の増大、歴大な財政赤字、少子高齢化、急激な円高・株安、輸出の減少、それに追い打ちをかけるような、東日本大震災と原発事故。確かにこの国には閉塞感と不安感が立ちこめている。それでも、この 20 年間で「失われた」とはわたしには思えない。

26 歳の社会学者・古市憲寿は、非正規雇用による格差や高齢化による現役世代の負担増などの世代間格差によって「不幸」を報じられる若者を分析して、いや、「日本の若者は幸せ」なのだという。「(内閣府の『国民生活に関する世論調査』によれば) 日本の若者の 7 割が今の生活に満足しているのだ。この満足度は、他の世代よりも高い。30 代でこの数値は 65.2%、40 代で 58.3%、50 代では 55.3%まで下がる。古市は過去の若者論を分析した上で、仲間との小さな幸せを求め、「今、ここ」に満足しながら、同時に、変わらない毎日に閉塞感を感じ、社会や将来に対して不安を持つ若者像を称して「絶望の国の幸福な若者たち」※と呼んでいる。 ※古市憲寿「絶望の国の幸福な若者たち」講談社 2011 年 p7 より

この 20 年間で「失われた」のは、既得権益を持つ大きな集団や制度、それに基づく価値観への信頼である。金融資本主義も官僚制度も家父長制度も、二大政党制も大企業中心主義も、グローバル化も市場中心主義も、ほんとうのところは誰のためのシステムなのかと疑うようになった。「失われた 20 年」とは、そうした信頼を失った権力や経済的な優位を甘受した者たちが、「昔は良かった」と嘆く自己憐憫の言葉である。社会状況の変化によって、変わってしまった人々の意識に応じてシステムや制度を変更するのではなく、信頼を失った旧態依然のシステムや価値観を無理矢理稼働させていることが、閉塞感と不安感の原因である。そんな「絶望の国」の社会や政治にうんざりして見限って、若者は慎ましくも堅実に「今、ここ」に幸せを見いだそうとしているのだろう。

本展は、1972 年から 1979 年生まれ
の 5 人の女性作家を取り上げている。
いずれもバブル崩壊後に成人し、
この 10 年余でアーティストとしての
キャリアを確実に積み上げてきた作
家たちである。閉塞感と不安感に満ち
て、様々な問題が山積し、既存の価値
観が大きく変化している現代にあっ
て、それでも彼女たちはそれぞれが自
分の足下を見つめながら自分の課題
と格闘し、独自の世界を創造している。
今もっとも勢いのある新進作家 5 人
の作品を考えることで、日本の「今」の一側面を浮かび上がらせてみたい。



菊地智子《鏡の中のゲーム、重慶》2011 年 作家蔵

大塚千野のタイムマシーン

「Imagine Finding Me」と題された作品は一見、誰でも自分のアルバムに貼ってある、ありがちな旅先のスナップショットに見える。色褪せた小さな L 版サイズの写真には、どれも少女と大人の女性が写っている。それが過去の大塚千野と現在の大塚千野のダブル・セルフポートレイトだと気付いたとき、俄然、それぞれの写真から重層な意味が立ち上がってくるのである。彼女の過去への旅は、センチメンタルではなく、ノスタルジーの趣もない。作品の中で、少し不機嫌に佇む少女は独立した一人の個としてまっすぐ前を向いて一生懸命に世界と対峙している。家族とは、国とは、言葉とは、人との関係とは、わたしとは……、誰もが逃れられない問いを、彼女はごまかすことなく真摯に問い続けている。

田口和奈の女性像

彼女はファッション雑誌を集め、そこに掲載された複数の写真をモチーフに、写真のようなリアリティで女性像をキャンバスに描く。その絵をもう一度写真に撮って、暗室作業で試行錯誤を繰り返して最終的なプリントに仕上げている。写真というメディアに備わっている現実性の前提が裏切られることにより、見る者は見ることそのものを疑わざるを得なくなる。そしてそれは作者の意図どおり、メディアが発するイメージが溢れ、リアルとバーチャルが混在し、自分自身が消失していくような不安に襲われる、「私」と「あなた」が交換可能な現実世界の騙し絵となっている。

菊地智子の中国

「The way we are」と題されたシリーズは中国のトランスジェンダーやドラッグクイーンを写している。菊地智子はドキュメンタリー写真の正道を歩んでいる。何年もかけて主題にじっくりと取り組み、彼らが置かれている状況を重層的に調査して客観的に描こうとしている点で伝統的なドキュメンタリーであり、また、被写体との距離感は、自分の最も大切な者たちへと注ぐ眼差しである点で、プライベート・ドキュメンタリーに近い。驚くべき速さで激変する中国社会に翻弄されながら、自分のセクシュアリティと向き合い格闘する彼女達の姿は、そのまま菊地智子のものなのだろう。

蔵真墨の伊勢参り

「お伊勢参り」には、来生の救済のための純粋な巡礼という大義名分にかこつけた、観光や他の目的も入り交じった本音が混じる。自分の写真に行き詰まった果ての気分転換としての「旅」と、それでもカメラを携帯せずにはいられない自分を自覚し、その自分が注ぐ視線を確かめるための「巡礼」。蔵真墨が「お伊勢参り」と名付けたのはそんな意味が込められているからである。蔵真墨の視線は確かに、優しいものではない。けれども本人が自認するほど、冷え冷えとした視線でもない。彼女はすれ違って、もう会うこともない人々や瞬間を愛おしんでいる。彼らの何気ない仕草や表情や、それが作り出す空気の中に、今を生きる強さと困難さと危うさを見ている。

笹岡啓子のフィッシング

「Fishing」と題された一連のシリーズでは、いずれも遠景で撮られた釣り人が立っている。ぴんと張った空気の中で、釣り人は何ら特別な存在ではなく、海と空と崖に溶け込んでいる。「竿を振り、糸を垂れる。全神経をわずかな糸の動きに集中させている。透明な糸に沿って光が走る。張り詰めた糸は見えない暗い海の中に照応している。束の間のことだとしても、釣り人の姿は過去からも未来からも隔てられ、海とひと連なりになる」。自分に纏っているすべての記憶や歴史、日常のあれこれ、すべての煩わしさを削ぎ落とし、自分という自意識さえも消却する瞬間、自分と世界との間のどこかに存在する、理想の風景を笹岡啓子は描き出している。



笹岡啓子《Samani, Hokkaido》
2010年 作家蔵

関連イベント

◆作家とゲストによる連続対談

- 12月8日(土) 大塚千野×笠原美智子(当館学芸員・展覧会企画者)
12月9日(日) 菊地智子×竹内万里子(写真批評家)
1月12日(土) 笹岡啓子×豊島重之(精神科医・モレキュラーシアター芸術監督)
×高橋しげみ(青森県立美術館学芸員)
1月13日(日) 蔵真墨×丹野章(写真家)
1月20日(日) 田口和奈×岩永忠すけ(画家)
時間:15時30分~17時 定員:各回50名 会場:東京都写真美術館2階ラウンジ
※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。
※当日10時より1階受付にて整理券を配布します。

◆新春特別フロア・レクチャー

- 2013年1月4日(金)14時~
本展の出品アーティストによる展示解説を行います。
解説:田口和奈、笹岡啓子、蔵真墨(以上 出品作家)、笠原美智子(当館担当学芸員)
※展覧会チケットの半券(当日日付印)をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

◆フロア・レクチャー

- 会期中の第1・第3金曜日14時より担当学芸員による展示解説を行います
※展覧会チケットの半券(当日日付印)をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

◆10 時間討論会『世界はこうなったが、写真はこうある。』

- 2013年1月11日(金)10時30分~20時30分
パネリスト:飯沢耕太郎、楠本亜紀、小原真史、沢山遼、清水穰、土屋誠一、笠原美智子
企画・司会:遠藤水城
定員:70名 会場:東京都写真美術館1階アトリエ
※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。
※当日10時より1階受付にて整理券を配布します。

展覧会カタログのご案内

本展の開催にあわせて、本展出品作品の図版、出品作家のステイトメント、笠原美智子(東京都写真美術館担当学芸員)のテキストを掲載した展覧会カタログを発行します。
『この世界とわたしのどこか』 発行:東京都写真美術館 価格未定
当館1階ミュージアムショップ ナディッフ バイテン(03-3280-7279)にて発売します。

お問い合わせ

東京都写真美術館 事業企画課 電話:03(3280)0034 FAX:03(3280)0033
展覧会担当 笠原 美智子 m.kasahara@syabi.com 鈴木 佳子 y.suzuki@syabi.com
広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com
前原 貴子 t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください。

somewhere between me and this world

- Japanese contemporary photography

(Hong Kong)

As a part of the “*Parallel Vision - Japan and Korea Contemporary Photography Exhibition*”, the Hong Kong International Photo Festival

Organized by The Hong Kong Photographic Culture Association

Date: October 13 to November 4, 2012

Venue: Hong Kong Arts Centre

(Tokyo)

Organized by Tokyo Metropolitan Museum of Photography, The Tokyo Shimbun

Date: December 8th, 2012 to January 27th, 2013

Venue: Tokyo Metropolitan Museum of Photography

Outline:

Japan is enveloped in gloom. I do not think it can be simply explained away as the result of the massive earthquake-tsunami and nuclear crisis. Rather I feel this is the end result of the system Japan adopted after the Second World War, which came to be symbolized by the bubble economy, a system of untrammelled capitalist values and economic performance, of bureaucratic control and focus on the construction industry, of politicians only interested in securing their vested interests. We are finally finding themselves unable to keep up, unable to accept diversified values and their desperate struggles are what give rise to the feeling of despair that is gripping the nation.

Sharing this general unease and irritation, while unable to avoid questioning the merit of simplification, contemporary artists find themselves confronted with the problem of what form of expression they should aim for. If we accept that contemporary art should “reflect the present and offer a premonition of the future”, then what sort of work would it be?

This is the exhibition of contemporary Japanese photographers who confront and struggle working in somewhere between them and this world.

Artists:

Kikuchi Tomoko:

Born in Tokyo, 1973. Graduated from Musashino Art University, 1996. Moved to Hong Kong, 1997, then to Beijing, 1999, where she has been working as a photographer for magazines and newspapers such as *News Week*, *New York Times*, *Far East Economic Review*, *Paris Match*, *V magazine*, and so on. She also works as a still photographer for the movies of James Ivory and Peter Chan since 2002.

Taguchi Kazuna

Born in Tokyo, 1979. Graduated from Tokyo University of the Arts with Ph. D. in painting. She has been invited by many group shows such as Yokohama Triennial, Yokohama Museum of Art (2011), “Trace Elements”, Tokyo Opera City Art Gallery and The Performance Space, Sydney (2008), Taipei Biennial (2006). She received a numerous prizes including Fine Art Division “Shinjin”(Most Promising Talent), The Gotoh Commemorative Culture Award, The Gotoh Memorial Foundation, 2010 and Nomura Art Prize, Nomura Foundation, 2008. Lives and works in Tokyo.

Sasaoka Keiko:

Born in Hiroshima, 1978. Graduated from Tokyo Zokei University, 2002. Awarded “Photographic Society of Japan Award”, 2008 and “Encouragement Prize at The Vision

of Contemporary Art, 2008, The Ueno Royal Museum. She held a numerous solo shows since 2001. Founding member of photographers' gallery in 2001 and editor in chief of *photographers' gallery press* from 2003 to 2008. She published numerous books including *EQUIVALENT* (Rat Hole Gallery, 2010) and *PARK CITY* (Inscript, 2009). Lives and works in Tokyo.

Otsuka Chino:

Born in Tokyo, 1972 and received MA in Fine Art Photography at Royal College of Art (London). She was awarded an Artist-in-Residence at The British Library (UK) in 2007 and also awarded Photography Bursary from National Media Museum (UK) in 2008. Otsuka has exhibited widely in UK and Europe including Victoria & Albert Museum, UK; Los Angeles County Museum of Art, USA; Huis Marseille Museum for Photography, Amsterdam; The Daiwa Foundation, London; The British Library, UK and Helsinki Photography Triennial 2009, Helsinki City Art Museum, Finland.

Otsuka's work are found in public and private collections including National Media Museum (UK), Wilson Centre for Photography (UK), LACMA (USA), Mario Testino Collection (France) and Huis Marseille Museum for Photography (Netherlands).

Otsuka has also published four books in Japan as a writer. Published her first autobiographical book in Japan at the age of 15 to much acclaim.

A monograph will be published by Dewi Lewis Publishing (UK) in 2012. Lives and works in London.

Kura Masumi:

Born in Toyama, 1975. Received BA in English Literature from Doshisha University, 1988. After studied photography in Tokyo Visual Arts, she became one of the founding members of photographers' gallery, Tokyo. Awarded "The 10th Photo City Sagami-hara Award, New Figure Encouragement Prize", 2011. She held a numerous solo shows since 2001. She published numerous books including *kura*, (Sokyusha, 2010) and *Adventures of Kura* (Sokyusha, 2011). Lives and works in Tokyo.

For further information: Kasahara Michiko, chief curator, m.kasahara@syabi.com
Suzuki Yoshiko, curator, y.suzuki@syabi.com
Kushiro Akiko, public relation, a.kushiro@syabi.com

Tokyo Metropolitan Museum of Photogrpahy
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
TEL 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://www.syabi.com>